

- 立科小学校/午前9時～午前11時30分
電話 56-3131 (呼)・有線2190 (呼)
- 立科中学校/午後2時～午後5時
電話 56-1076 (呼)・有線2251 (呼)
- 立科町児童館/
午前 11時40分～午後1時30分
電話 56-0303 (直通)
有線 8889 (直通)

※予約をされる方は児童館または小・中学校の
教頭先生へご連絡をお願いします。

6月、 怖い人、五無齋先生を偲ぶ

立科町教育相談員 岩上起美男

6月は、立科町が輩出した偉大な教育者、五無齋・保科百助先生が誕生し、そして、逝去した月です。

五無齋先生は、明治元年6月8日、横鳥村山部（現立科町山部）に生まれ、生涯、極めて多角的な才能と個性を遺憾なく發揮して、誕生日前日の明治44年6月7日、忽然と逝かれたのです。

五無齋先生を語る書物の中で、五無齋先生を「怖い人（先生）」と評する叙述に二度出会いました。

その一つは、立科町出身の卯月雪花菜氏が著した歴史小説「教育のひと」（文芸社発行）の一場面で、若い授業生（補助教員）が発したものです。

明治24年3月、長野尋常師範学校を卒業した五無齋先生は、その4月、下水内郡の飯山小学校に赴任しました。

下宿した真宗寺（島崎藤村の「破戒」の下宿寺、蓮華寺のモデルとなった寺）における五無齋先生の生活は、小学校の教師で、2年前から真宗寺に下宿していた森繁吉が、食卓を囲むたびに、「保科君の勤勉さには、舌を巻くよ。」と繰り返したほどです。健康体そのもので、早起床すると、冷水摩擦に柔軟体操の後、広く群書を渉猟する毎日であったそうです。

五無齋先生は、教授法の研究会を起

して、自分で「書き方」の研究授業を行い、大いに成果を上げました。以下、「教育のひと」の一節を引用させていただきます。

百助は他にも、放課後には授業生を集めて英語のスピーキングや外国の様子も教えた。日本人の先生から、日本語英語しか教わっていなかった当時の教師に比べて、アメリカ人宣教師から直接英語を学んだ百助の英語の発音は実用的であった。また、下宿に帰っても、論語の講義を授業生の清水（清水謹治「破戒」の主人公、瀬川丑松のモデルになった人物）にした。百助は、恐らく師範学校に入ることになるだろう授業生の今後を考えて、さまざまな授業を行っていたのだろう。

これは百助本人が、師範学校に入ってから必要だと思った勉学の予習だった。「保科先生は、怖い先生だなあ。」「それに、もの凄く真面目だ。」授業生たちの中で、百助は評判になっていた。

もう一つの「怖い人」という評は、海軍大将、東郷平八郎によるものです。

日露戦争直後の明治39年5月15日、長野市で保科塾を開いていた五無齋先生が、衣紋正しく城山館に赴いた。

当時の日本は、大國ロシアを破り、戦勝気分が沸き返っており、その日、日本海海戦の立役者であった伊東祐亨元帥（海軍軍令部長）、東郷平八郎海軍大将（連合艦隊司令長官）、上村彦之丞海軍中将（第二艦隊司令長官）の善光寺忠靈殿参拝に、長野市内の沿道は北信各地から集まった群衆で埋まった。

長野市は、城山館で三將軍の歓迎の宴を開いた。その会場に五無齋先生が押しかけたのだ。先生は、誰にでも飾らず偽らず、事実をありのままに言い放つので、とんでもない演説をして、市が主催した歓迎会で失礼があつてはならぬと受付で入場を断られた。だが、先生はテコでも動かない。困り果てた受付の役員は、絶対に演説はしないという条件付きで入場させた。会場では屈強の若者2人が、先生の両側近くで演説阻止の任に当たった。しかし、將軍側の謝辞が終わるや、先生は警戒の2人を振り払って立ち上がり、声高らかに、「三將軍に歓迎の辞を申し述べる。」と前置きして、次の四首を朗詠した。

露西亜負けたりロシア負けたり
露西亜負けたりロシア負けたり
されど又世界は敵ぞせかいてき世界敵なりせかいてきなり
故に又金を溜むべし金ためよ金を溜むべし金をたむべし